

地球の地下を科学的に探究する企業力 社長三代記「中央開発」

技術者を救済した学者

「もの書きになりたい」という若者は多い。しかし、個人でもの書きになり生計を立てられる人間は限られている。特に、修業時代は食うことに疲労困憊する。『たけくらべ』の樋口一葉にしろ、『放浪記』の林芙美子にしろ、貧乏神にとりつかれていた。

そこで、もの書き志願者の生計を助け、彼らの能力を生かしながら彼らを束ねる者が必要になる。それが出版社である。作家の司馬遼太郎も若き日、新聞社で実力を蓄えた。筆者は国際開発ジャーナル社という組織をつくって「書きたい」という願望を果たしてきた。

世の中にはいろいろな分野で、いろいろな技術を探究する人間がいる。彼らは時に「技術者バカ」と言われるほど、自分の求める技術に熱中する。しかし、残念ながら「技術者バカ」だけではメシが食えない。食えないと自分の理想も実現できない。せっかくの技術も世のため人のために役立てる手立てがないと生かされない。こうした技術者たちに生き甲斐を与えるのが会社組織である。

戦後、多くの技術者が母集団の解散で路頭に迷った。中でも中国

大陸から引き揚げてきた技術者たちは食うに困った。誰かがそれら技術者を束ねて、その優れた技術を世のために役立てるべく、立ち上がらなければならなかった。

その時、大陸でダム開発の仕事に携わり、戦後、日本大学で教鞭をとっていた一人の先生が教え子の技術者たちを救済すべく、彼らを束ねる一つの企業体を組織した。

その中心人物こそ1946年(昭和21年)に匿名組合中央開発技術社を立ち上げた瀬古新助氏であった。この組織の下で千葉県印旛沼の開発が進められた。その時の大義は戦後の食糧難救済であった。

2年後に本格的な株式会社へ移行する。実は、わが国開発コンサルタント業界のトップランナーである日本工営の創設者、久保田豊氏も戦後、多くの技術者救済に乗り出している。そこに技術者の強力な団結力を見ることができる。

中央開発は、地質調査に優れた技術者たちが結集して、「土と水」抜きでは語れない歴史を積み重ねてきた。それから二代目の瀬古隆三社長を経て、今では三代目の瀬古一郎社長の時代を迎えている。その著書名でも初代の瀬古新助氏が「わが人生 土と水」とし、三代目も同じく土と水をテーマに

「土と水の探究者たち」とした著書を、創立70周年を迎えた本年1月に出版している。二代目の隆三社長は名の知れた研究者である。発表論文33件、特許と実用新案17件という研究実績を会社に残している。

地球の地下に強い企業

ここで少し会社を紹介してみよう。会社は「建設総合コンサルタント」というキャッチフレーズで呼ばれている。得意とする分野は主に「土質・地質、土壌地下水汚染・環境」などの調査事業。具体的には河川・砂防・建設環境、ダム、道路・橋梁・トンネル・鉄道、上下水道、港湾・空港などの計画設計、調査などを得意とする。端的に言うとうと、あらゆる地上建造物の地下基盤の構造(土と水の状況)対策を得意とする技術者集団だと言える。

近年では、地震や台風などの自然災害への防災技術、土壌や大深度地下の地盤環境調査技術、地域コミュニティ形成などの環境創造技術、GIS(地理情報システム)、ITなどを駆使した地盤情報技術などの分析で独自の道を歩む。現在の社員数は